



—目次—

- キャンプ概要●
- ハンセン病について●
- キャンプまでの流れ●
- ワーク●
- ケア●
- キャンプの楽しみ●
- キャンパーの生活●
- JIA ネットワーク会議●
- キャンパー紹介●
- 紀行文●
- おわりに●

おおまかなキャンプスケジュール

- 8月2日 成田発
広州到着後でタクシーで呉川へ
- 3日 トラックタクシーにて呉川市→土光村へ
中国人キャンパーと合流
- 4日
| ワーク・ケア
- 7日
- 8日 呉川に観光
北京オリンピック開会セレモニーをテレビで見る
- 9日 日本人パーティー開催
- 10日
| ワーク
- 12日 村人から料理を振舞って頂く
- 13日 海へ出発
- 14日 村へ帰る
ワーク
- 15日
| ワーク
- 16日
- 17日 お別れパーティー
- 18日 村を出発
バスで広州へ
広州で観光、ホテル泊
- 19日 一部キャンパー広州発
一部キャンパー各自旅行

●キャンプ概要●

日程：2008年8月2日～8月19日

場所：中国広東省土光村

参加人数：日本人 11人

中国人 13人



●ハンセン病について●

感染は未治療のらい菌保有者(特に菌を大量に排出するL型患者)からの経鼻・経気道的におこる。

さらにらい菌と接触する人の95%は自然の免疫で感染を防ぐことが出来る。小児期以降の感染による発病は近年では認められていない。

潜伏期間は数年から数十年という幅がある。

らい菌は好んで人の末梢神経に入り込み、種々の機序により神経障害を生じさせるため、進行するとその支配領域の知覚神経、運動神経、自律神経が様々な程度に障害され、ハンセン病が完治している村人に、今も尚、その症状は残っている。

運動神経が侵されると、手の指が曲がって伸ばせない(鷲手変形)、足のつま先が上げられない(下垂足)、目をしっかり閉じられない(兔眼)、口がすぼめられない(顔面神経麻痺)、手が手首のところで垂れ下がったようになる(下垂手)、痛みを感じないために小さな傷に気づかず、傷がだんだん大きく深くなって、穴が空いているような状態になる(足穿孔症)などの症状がでる。

ハンセン病の後遺症により、傷がしやすい上になかなか治りにくいということがあり一般的には十分なケアが必要である。また、拘縮に関してもリハビリを繰り返し実行していくことが重要である。



●キャンプまでの準備●

ワークキャンプ参加者募集

参加者募集は、大学の教室を借りてのワークキャンプ説明会と、ホームページや SNS などのインターネットでの告知を中心に行いました。6月1日の締め切りまでに定員となり、キャンプ参加者が確定しました。



キャンプ前ミーティング

キャンプ前ミーティングは、各地域の代表者ミーティングと、各地域内のミーティングの二つが行われました。今回の土光村でのワークキャンプには、湛江（土光村の所在地）、香港、台湾からの学生が参加したため、キャンプ前に参加者全員が顔を合わせて話すことが出来ず、各地域の参加者全員へキャンプ内容を確実に行き届かせる必要があったためです。

各地域代表者ミーティングには、日本、湛江、香港、台湾から各一名の代表者が参加しました。ミーティングでは、キャンプ中のスケジュールやワークプロジェクト等の基本的な決定事項が話し合われました。

各地域内ミーティングでは、各地域代表者ミーティングで話し合われた内容の伝達が行われ、キャンプ開催へ向け、村人が負っている後遺症ケアや、キャンプ中に行うレクリエーションの詳細について話し合われました。



ハンセン病勉強会／JIA 代表原田燎太郎報告会

キャンプ開催に向け、私たちはミーティングだけではなく、ハンセン病についての勉強会や、中国でのワークキャンプを通じた活動の理解を深めるため、中国の NGO・JIA 代表原田燎太郎さんの報告会に出席しました。

ハンセン病勉強会は、7月5日に国立療養所多摩全生園で行われました。勉強会には、IDEA ジャパン理事長の森元美代治氏やFIWC 関西委員会元委員長で中国におけるハンセン病の歴史に精通している國分伸浩氏に参加して頂きました。森元氏は多摩全生園にある国立ハンセン病資料館の案内を通して日本のハンセン病事情についてお話を下さり、國分氏は中国でのワークキャンプの参加経験や中国におけるハンセン病の歴史研究についてお話を下さりました。



●ワーク●



① 地面のコンクリートを敷くという舗装

土光村は山の中にあつて村の建物のひとつひとつに高低差があります。そのため、地面は坂になり、でこぼこ状態で舗装されていません。また、山の中のため降水量も多く、雨が降ると地面の土が水分を含み、ぐちゃぐちゃの地面の状況がしばらく続きます。多くの村人足が不自由であり、中には義足の村人も多くいます。この地面の状況では、歩きづらく怪我をする可能性が低くありません。そのため、いくつかのワークニーズの中でももっとも希望が高く、完成し村人の行き来も簡易にすることができました。

② 屋根の修理

古くから建っている建物の屋根から雨漏りがしているという意見が多くあげられました。これらの屋根は数年に1回張替えなければいけないものです。すでに期間がすぎてしまい、村人が日々利用する台所や村人同士が交流する共有の場に雨が降ったときに雨漏りしています。そのため、屋根を張替え、状況によっては大工を呼んで骨組みから作り直しました。

①②を通して

土光村では、5年前より原田燎太郎さん、吉田亮輔さんによりワークキャンプが開催され大きなワークニーズを解消してきたので大きなワークニーズはなくなり、3年間、ワークキャンプが行われなかった。そのため、小さいワークニーズがいくつかあることがわかり、キャンプを開催した。キャンプ中、台風の接近や雨により天候の悪化が続き、ワークスケジュールに変更があった。しかし、ワークへのモチベーションも高まり、村人もキャンパー以上に共にワークをすることができ予定通りのワーク内容を完成させることができました。材料と時間があまったので、村人の要望に少しでも答えようと、予定外のワーク（3年前に作った階段の舗装、シャワー室前の舗装、台所の修理等）をキャンパーが自ら提案し実行することができました。しかし、時間がないため計画性が低かったです。ある一定の村人のためだけのワークになり、差が生じるなどの反省点もあげられました。やはり、自分の生活を営むことで精一杯な村人は屋根の修理や台所の修理までできる体力、修理するために必要な手足の自由さがいないため、生活する環境に不足部分が出てくる。その不足部分をミニキャンプ、ワークキャンプを通して補っていきたいです。また、4月に下見に訪れ、8月に再び訪れたら、表情が明るくなっていました。6、7月に中国人大学生たちがミニキャンプを行っていたためです。ワークニーズを補うため、そして、本当のキャンプの意義というものを「キャンプ」という形が土光村に続けばいいと思います。



●ケア●

(1) 目的・目標

- ① 村人にケアを行い、「気持ちがいい」と感じてもらう。
- ② そして継続的な健康への意識をもってもらい、よりよい生活をしてもらう。
- ③ ケアを通してキャンパーと村人がコミュニケーションのきっかけを作る。
- ④ キャンパーが実際に村人の体に触れることで、ハンセン病の理解を深める。



ハンセン病は皮膚の症状をあらわしやすい病気であるが、最も重要な症状の1つは末梢神経障害である。ハンセン病が完治している村人に、今も尚、その症状は残っている。その症状のために、村人の日常生活に支障が出ており、十分な生活が送れていないと考えられる。そこでキャンパーが短期間ではあるが日常生活の援助を行い、キャンプ中だけでも村人の生活の質を上げ、キャンパーのケアにより、村人が健康へ意識を向ける機会となることを考えた。また日本人キャンパーは基本的に言語が通じず、コミュニケーション手段が限られていることや、キャンプが短期間のために村人との信頼関係を築くのは難しいと考えられる。そこで村人のためにケアを提供することで、キャンパーが村人に何かをしたいという気持ちを伝える機会とし、村人との信頼関係の構築のきっかけとなるようにした。最後にハンセン病の問題の一つに差別・偏見が挙げられる。キャンパー自身もハンセン病の身体的な症状への理解が不十分であると考えられる。ケアをする中で実際に村人の身体に触れ、ハンセン病の理解を深めることを目標とする。

(2) 実施内容

- ① 看護ケア（足浴、手浴、洗髪、ハードスキン（胼胝）削り、爪切り、耳掃除、血圧測定）

日本で必要物品を購入。ハードスキンを削るための竹を使った道具は村で準備した。ワークが休みの時など時間が空いたときに実施した。

- ② プロミスリング

プロミスリングが切れたときに願い事が叶うとされており、それぞれの夢を実現させるためにプロミスリングを作成した。またプロミスリングは“サークル”でもあり、キャンパーと村人がキャンプ期間中で築き上げた絆（輪）をキャンプが終わっても忘れないように Good Bye Party の時に村人へプレゼントとした。



(3) 評価

- ① 予想していた以上に村人は健康への意識が高く、足の状態が3年前と比べて改善されていた。また実際に足浴を中心としたケアを行うことにより、村人が健康についての問題点や不安を表出する機会となっていた。問題点や不安を表出することが村人の精神的なケアとなっていたり、村人の問題をキャンパーと共に考えることにも繋がった。
- ② ①でも述べたが、ケアをしている際に、村人が普段は口にしない健康上の不安を訴えたことから、ケアによって引き出されるコミュニケーションがあり、村人とキャンパーの信頼関係をより深いものに出来たと考えられる。またケアを実施後、遠慮がちであった村人がキャンパーとの関わりを求めてくることも見受けられ、村人が外部の人間であるキャンパーを受け入れるきっかけともなったと考えられる。
- ③ ケアを通して身体的変形などハンセン病による障害をキャンパーが見て、触って、村人に生活への障害について聞くことができた。そこから村人の障害を理解することができ、キャンパー自身にも少なからずあるハンセン病への差別意識の改善に繋がったと考えられる。また具体的な障害を理解することにより、今後のより村人の視野に立ったワーク計画を立案することにも繋がると考えられる。

キャンプのお楽しみ



吳川におでかけ☆

8月8日に吳川まで観光に行きました。途中ぐちゃぐちゃの道路にはまってしまった車を押すというハプニングがありながらも、それぞれショッピングをしたり、食べたり、飲んだりしながら村よりちょっと都会な街を楽しみました。

その日の夜は吳川で買ってきたお菓子を食べながら村人達と一緒に北京オリンピックの開会式をテレビで見ました！！

日本人パーティー☆

このパーティーの目的は、

- ① 村人達や中国キャンパーに日本の文化に触れてもらうことで、少しでも中国から遠く離れた日本を身近に感じてもらうこと
- ② 土光村に来て数日が過ぎた中、もっとキャンパー同士が仲良くなって残りのキャンプを盛り上げていくこと
- ③そして、モチロン楽しんでもらうこと

七夕しちやいました☆

事前に各家に渡しに行ったパーティーの招待状と一緒に、七夕の短冊を村人達に配布。そして、パーティー当日に願いごとを書いた短冊を持って来てもらい、笹に結びつけ、成就を願いました。

日本文化紹介で日本を身近に！

みんなに日本文化を知って貰おうという事で、ひな祭り・子供の日などの祝日、相撲など日本独自のスポーツやさくら・紫陽花などの花、すいかわりを紹介しました。村人達はもちろん日本語が分からないので、とうちゃん（日本語→北京語）とキッド（北京語→広州語）の2重通訳です。

中でも特に盛り上がったのは、相撲の紹介です。当初は口頭での説明の予定でしたが、急遽実践することに。「ハッケヨーイ、ノコッタ！！」上半身裸の男子キャンパー達が激しくぶつかり合います。その活気に押されたのか、村長や中国人キャンパーも参戦する事に…。

日本食は大人気!?

普段、日本食を食べる機会があまりない村人達や中国キャンパーに日本食を振る舞いました。メニューは、『カレー・ぜんざい・厚焼き卵・みそ汁・おにぎり・肉じゃが』と日本を代表する料理ばかり。珍しい料理に「美味しい！」「作り方教えて」「料理上手だねー」と言う声多数！（けど、カレーはルーを混ぜて、みそ汁はみそ汁の元をお湯で溶かしただけ…ごめんね。）



海にお泊り☆

キャンプも中盤にさしかかった 8 月 13 日、私たちは村からそう遠くないプライベートビーチに出かけた。村から 1 時間くらいのところであって、すごくきれいなところ。

寝袋、銀マット、ゴザなどを持参することになっていたのですが、いったいどんなところに泊まるんだろうか、と思っていたら素敵なペンションだった。ベッドが 4 つにお湯のシャワー室が 2 つ、そしてなんとクーラーが！！感動した。キャンパーにはたまらないご褒美。十分涼んでからまた海へ。

投げこんだり投げ込まれたりしながら波間をさまよう姿は、幼いころの影と重なり合った。

海辺の、もうすぐそこが浜辺のお店で食事をした。海辺というだけあって、シーフードがおいしかった！

食後、花火をみつけた。日本でおなじみの手で持って遊ぶ花火はもとより、長さ 60 センチ以上の超巨大ロケット花火や 107 連発打ち上げ花火が売られていた。花火の威力があまりにもすさまじくて、楽しむというよりは若干の恐怖をもたらした・・・夜も更け、ペンションにもどり、眠った。部屋の中は海と同じにおいがした。

帰り道は来た道と違い、ペンションが立ち並ぶプライベートビーチ内を通った。意外と広くてびっくり。またいつかこの海にみんなで来られることを願いつつ、村へと帰った。



メモリーブック☆

キャンパーが村を訪れた印にお礼の意味も込めて写真とメッセージをそえたメモリーブックを計画して土光村に向かいました。

しかし、村にいくと 5 月のミニキャンプで中国キャンパーがつくった写真やメッセージが書けるノートが村人ひとりひとりに配布されていたため、そのノートに書き込む事になりました。メモリーブックについても中国キャンパーと事前に情報交換をしておく必要があった。

計画とは違ってしまっただが、ノートがあることにより村人は写真やメッセージが整理され見やすくなる。またキャンパーが村を訪れた際のキャンパー同士の情報交換ツールにもなるため、ノートを作った事はとてもすてきなアイデアだと感じた。

今回、ノートには『キャンプ期間・パーティーなどの行事日程・キャンパーの名前・一言メッセージ』を書き込んできた。写真を現像する時間がなかったため、もう少し早くから準備をしておく必要があった。

村人がメモリーブックをみてキャンパーと過ごした日々を思い出してくれていたらうれしく思う。





日本人パーティー☆

ワークキャンプ最終日の8月17日の夕方から、村人を呼んで「お別れパーティー」を開催しました。

天候もよく、外に机を並べ、出し物も披露しました。

日本人と中国人キャンパーのレク係り合わせて6人がプログラムを考え、当日は全員が力を合わせて準備をしました。プログラムは、中国キャンパーのダンス、日本キャンパーのソーラン節、中国の歌、日本の歌、風船ゲーム、村人と一緒にダンス、村人へのプレゼント渡し、そして花火をしました。村人達も積極的に参加してくれました。

最終日ということもあって、本当に団結して準備ができ、パーティーも最高のものになりました。

●JIA ネットワーク会議●

8月21日～24日、広州近郊の宿泊施設でJIA主催のネットワークカンファレンスが行われ、FIWC 関東委員会のメンバーも参加させて頂きました。

ネットワークカンファレンスには、中国の広東省、雲南省、広西チワン族自治区、湖南省、海南省の大学生によるワークキャンプ団体の代表者、日本のFIWC 関西委員会、九州委員会、早稲田大学の「橋」の学生も参加し、各地域で行われているワークキャンプを通じた活動報告や、それに関するディスカッションが行われました。台風接近のため避難を強いられるというハプニングもありましたが、中国の他の地域の学生や日本の他の委員会や団体の学生と知り合うことができ、今後、中国での下見を一緒に行うなど、共に活動していくことが出来そうです。





●キャンパーの生活●

AM 5 : 0 0

ベッティーナ：ランニング（台風の日も）

AM 8 : 0 0

朝食作り開始

本当は当番制なのに朝に弱い日本人はほとんど寝てました

AM 8 : 3 0

みんなで朝食。

朝は基本おかゆとか。あと卵料理とか。



AM 9 : 0 0 ~ 1 2 : 0 0

ワーク 買い物（買い出し班）料理、掃除（家事班）
村人と一生懸命汗をながしてワークする人、掃除する人、
買い出しに市場へ行く人。ちなみに市場へはバイクで3ケツします。もちろんノーヘルです。

PM 1 2 : 0 0

みんなで昼食

中国キャンプのごはんは基本的にとてもおいしいです。
とくにトウちゃんがむしゃむしゃ食べる料理は本当においしいごはんです。



PM 1 : 0 0 ~ PM 2 : 3 0 お昼寝の時間

中国人は基本的にお昼寝します。学校にもお昼寝の間があるみたいです。暑い日はお昼寝の時間延長！

PM 2 : 0 0 ~ PM 5 : 0 0 午後ワーク・晩御飯の準備（家事班）

PM 6 : 0 0

晩御飯

毎回おいしい中国料理。毎食かならずニンニク料理はです。日本で食べる一年分をキャンプ中にとった気がします。

PM 7 : 0 0

フリータイム

村人と交流したりお風呂入ったり、ビール飲んだり
おどりの練習したり

ほとんどの村人はこの時間はみんな集まってテレビ
を見ています。オリンピックの開会式の日には村人も
中国人キャンパーもテレビばかりでした。

PM 9 : 0 0

ミーティング

PM 9 : 3 0 ~

自由時間と睡眠時間

多くの村人は9 : 0 0には寝てしまいます。この時間からはキャンパーの交流の時間です。

朝まで熱く語ったり、ビールのみすぎて外で寝ちゃったり、体壊して寝たり。

ときには朝日を見に走った。とりあえず飲みすぎに反省・・・



●キャンパー紹介●



■高橋 真代■

男前でハスキーボイスが印象的なキャンプリーダーっ、まよちゃん!!! 中国人キャンパーに吐くまで白酒を飲ませた? って疑惑もあるけど、キャンプ中は、毎日”最高なキャンプ”を作るために

中国人キャンパーと話し合いをしてくれました。思いっきり泣いて、笑って、セクハラして、何事にも一生懸命取り組む素敵な子です。ちなみに、キャンプ中に彼女にクチビルを奪われた人がいたとかいないとか…(BY:渡部 友子)



■原田 真二■

笑顔がキュートなスナフキン。一言じゃ言い表せないけど、こんな感じ印象をもってる。キャンプにはこれまで6回も参加しているベテランさんで、色んな方面から助けてもらった。村人

とお酒をこよなく愛するひとでもある。土光村からキャンプアウトするときは、初めて目を潤ませた。

(BY:鄧 晶音)



■江口 潔和■

基本的に、寝てる→めっちゃワークしてる→と、思ったら村人のところでさぼってる→ガンガンたばこ吸ってる→やっぱり寝てる→夜になったら酔っ払ってるのサークルのどれかだったと思います。3日間

は風呂には入らないし、3日間は着替えもしない。まさかまさかのワークリーダの江口君です。でもでも、ワークキャンプと中国には誰よりも熱い思いのある、私の素敵な兄の一人です◎(BY:高橋 真代)



■小関 太郎■

たろさんは色んな事に気が利くすてきな人。自分の意見をちゃんともっててバシっていえる人。中国では苦手と言ってる英語で積極的にコミュニケーションとったり…すごいなーと思う。

村人のやさしさに触れてイイ経験ができたみたいなのでよかったです♪でわ、中国ではキャンプパワーでプチヘビースモーカーだったたろサン紹介を終わります。(BY:亀石 沙織)



■鄧 晶音■

3回のキャンプで名実共にベテランキャンパーのとーちゃんです。

日本語、中国語の通訳として大活躍! 持ち前のマイペースさと、飴と村人を誰よりも愛してキャンプを盛り上げてくれました。

(BY:渡辺 潤)



■米川 佐和子■

好奇心旺盛なさわこ! いつも元気♪なぜなら・・・??寝るのが超はやい!!

やっぱり健康は早寝早起きが基本よねッ!

頑張り屋さんでとっても頼りになりました!(BY:荒木 佑子)



■渡部 友子■

ともちゃんはムードメーカー的な存在です。いつもニコニコしていて、周りのみんなを自然と和ませてくれる人。キャンプ中も自然に周りの気遣いをしてくれたり、

困ったことがあると話を親身になって聞いてくれたりするほど、とても心の優しいともちゃんです。

レク係りでも、一生懸命案を考えてくれたり準備を積極的にやってくれたり、と、すごく積極的で頑張り屋。ともちゃんは、いつでも必要不可欠な存在です。そのぐらい、最高です！笑(BY:米川 佐和子)



■亀石 沙織■

「さおもやりたーい！」「さおも食べるー♪」「さおも飲んでみたーい！」「さおもー・・・！！」キャンプ中に何回聞いたことでしょう。見掛けによらずアクティ

ブで積極的なナースの卵の沙織です。(BY:荒木佑子)



■荒木 佑子■

さばさばとしていて、つっぱっているように見えるが、要所要所の責任感親切気遣い女性らしさがとても魅力。

かっこいい女！

(BY:原田 真二)



■渡辺 潤■

でかい。すもうがすごく強い。日本酒が好き。とても思いやりと情熱のある人で、毎日だれかしらと夜中まで話していた。

ギターも弾ける。その見かけから

80年代アメリカロックシーンのマッチョギタリスト(コード・アルベルトに代表される)のようなごりごりのパワープレイを想像していたが実際は歌い手重視の、やさしい、彼の人間性そのもののようなあたたかいプレイで、みんな気持ち良く歌うことができた。肉体をいかしたパワーワークだけでなく、ケア隊長として村人のケアにも全力で取り組んでいた。ケアの知識が全くない僕にも、やり方を丁寧に教えてくれたので、一緒に村人のケアをすることができ、コミュニケーションの大きな手助けをしてくれた。

マッチョだけど血圧も計ることができる。あとサッカーも上手。(BY:江口 潔和)



■安部紀孝■

今回初参加ののり。でも、初参加とは思えないくらい積極的に英語でのコミュニケーションをとるけっこうすごいやつ。特に女の子がだいすきでいつ

でも脇には中国人の女の子がいるようなプレイボーイ。

時にはキャンプ中でも携帯のロックマンをやりこむインドアな部分もあったり...

タバコの大好き、女の子大好き、ゲーム大好きなのり。本当におもしろくていいやつです。(BY:小関 太朗)

●紀行文●

高橋 真代

「しあわせキャンプ」と、私が去年参加した FIWC 関東委員会フィリピンキャンプリーダーはこう言った。今年 3 月末、私が 2008 年中国キャンプリーダーに決まったとき、「どういうキャンプにしたいか？」と尋ねられ、一番に浮かんだ理想のキャンプが「しあわせキャンプ」であった。

土光村キャンプは「しあわせキャンプ」だったのか？はっきり言って、下見、準備、キャンプ中含み、つらいことなんかいっぱいあった。天下の文部省が与えてくれたまったく無意味な受験英語を引っさげて私は旅立ってしまった。もちろん、中国語は「にーはお」が村人に伝わって感激したレベルの私。英語、中国語ともに私にとっての最強の敵は、言語。生活のベースがライバルとなってしまった。

しかし、このライバルと戦うときですら、ライバルに泣かされたときですら、助けてくれるのはキャンパーだった。

別れの際、あんなに手を強く握ってくれたのは、日本語でも中国語でも英語でもない呉川語しか話さない村人だった。

そんな素敵な兄弟、じいちゃんばあちゃんに出会えたことが、「しあわせ」なんだと思う。大切な家族になれたことが「しあわせ」なんだと思う。このつながりが「しあわせ」だと感じて、再び会えることが「しあわせ」なんだと思う。まだ、土光村キャンプは終わってない。

渡辺 潤

3 年ぶりの土光村に着いたとき、3 年間時間が止まっていたかのような感覚を覚えました。

村人の笑顔、温かさ、何もかもがそのまま、嬉しかった。

今回の自分の目的は忘れかけていた大切なものを思い出すことでした。

土光村にはその置き忘れてきたものがたくさんあり、そしてそれを思い出させてくれたのは村人やキャンパーでした。

今回キャンプで出会ったみんなへ多謝！

渡部 友子

2 回目の中国キャンプ☆村人と村人・村人とキャンパー・中国人キャンパーと日本人キャンパー・そして、日本人キャンパーと自分…。人と人との関わり方を意識する 2 週間だった気がする。まだまだ未熟な自分を再確認。これから、頑張ろーッと(^^)!!!

小関 太郎

今回のキャンプは本当に楽しかったです。多くの仲間たちに囲まれて 18 日間、充実した日々がおくれました。今回で私はキャンプに参加するのは三度目になりました。参加する人たちによって毎回キャンプはちがったものに感じます。今回のキャンパーは中国も日本も関係なくとても仲良く交流できたことが本当によかったです。

今回のキャンプで自分にとっての一番の収穫は今までよりも村のおじいちゃん、おばあちゃんを身近に感じられるようになったことだと思います。

今までのキャンプでは私にとっては村の人達はやはり村の人でしかありませんでした。ただ今回のキャンプでは村の人たちを家族のように感じられました。本当にやさしくしてもらって、でも自分は感謝の気持ちすら正確には伝えることができなくて歯がゆい思いもしました。できることなら、また村に行って彼らとまた笑って過ごせたらなと思います。

亀石 沙織

みんなと土光村で過ごした夏！！すごーく幸せでした。一緒にご飯食べて、ワークして、遊んで…いつも誰かが笑ってたね。大家族みたいだったね。

村人あったかかったなー。笑顔きれいだったなー。子供やんちゃだったなー。でもかわいかった。愛らしかった。

『ただいまー』がうれしかったよね。だからまた絶対『ただいまー』で村に帰りたい！！

みんなと過ごせて本当によかった。ありがとーう

江口 潔和

優雅で感傷的な麻痺と飛翔

村の生活はひどく優雅だ。

得るものも失うものもなく彼は生活を営み

得るものも失うものもなく彼女は生活を続ける

まるで生きることが生の目的であり

生きることが生の喜びであるかのごとく、彼、彼女以外の人間に思わせてしまうほどに。

生きることが至上の目的であり喜びであった時代が、かつて僕にもあったのだろうか。まるで思いだしたかのようにその優雅さが意識の底から染み渡ってくる。生活が僕の欲を麻痺させるほど、優雅さは増長してゆく。

その優雅さに浸りながら彼と過し、彼女と過してゆく中で、彼の一言は重みを増し、彼女の二言は僕をひどく感傷的にする。

隣人の声さえ知ることのない無関心は優雅さの中で麻痺を起し、遠く離れた彼の過去を思い涙を流す。彼女の運命に涙を止めることができなくなる。激しい怒りが込み上げ、自分の無力を思い出す。感傷は止まることがない。

この思いは彼の人生に対する冒瀆であり、彼女の生に対する許されない中傷なのではという恐怖が、僕をまるで一人ぼっちにしてしまう。

それでも思いは止むことのない。飛翔しつつけるなかで愛が純粹なものへと近づいてゆくのを願うばかりだ

荒木 佑子

はじめてのキャンプ。行く前は頭で考えすぎて、まさかの知恵熱。みんな心配かけてごめんね。

村では発見、感動、衝撃があった。ここには書ききれないくらい。全部が新しかった。

はじめは「誰も私を知らないトコロに行きたい。」なんて言って旅立ったのに、みんながいなきゃ何もできなかった。日本とまったく違う生活の中で自分の弱さ、強さに気づいた。義足をした村人と、足を切断した自分の祖母が重なった。村人の優しさに心から感謝し、すべての人に優しく接したいと思った。みんなこんなに素敵な顔して笑うんだよって、誰かに伝えたい。

キャンプに参加しすばらしい出会いができたことをとても幸せに思う。皆、ありがとう。

米川 佐和子

この夏、初めて私は中国ハンセン病快復村でのワークキャンプに参加しました。私は数日遅れての参加だったのですが、村人やキャンパー全員と毎日同じ場所で同じ時間を共にし、本当に掛け替えのない2週間になりました。

言葉の壁はあったものの、ワークを一緒にやったり、踊りを一緒に踊ったり、歌を一緒に歌ったりと、何か一つのことを「一緒」にやることで、本当に心が一つになった気がしました。単純な考えかもしれないけれど、一つの事や目標に向けて一緒に力を合わせて何かをすることによって、本当の絆が生まれるって実感しました。

また、そもそも「村人」と「キャンパー」という様に自分の中で分けて考えてしまう時点で、差別が生まれているのでは。という意見を、現地で行った報告会の時に話題になりました。私は、その意見を聞いた時、自分自身考えるきっかけになりました。これはハンセン病問題だけに言えることではありませんが、みんな一人一人が人間なんだってことを、いつも心のどこかに置いて、一対一で真剣に向き合っていくことが、毎日の生活の中で本当に大事なんだと教わりました。

私は、また土光村に行きたいなと思います。今度行く時はもっと広東語を話せるようにして、少しでもいいからもっと村人と交流がしたいです。何も飾らず、ありのまま接して、ありのままの私で向き合っていきたいと思います。今回、村人と仲間との出会いを通じて、みんなと一緒に笑って楽しめたこと、ちゃんと向き合うことが大事だと気がついた事など、その一瞬一瞬すべて本当に素晴らしい時間になりました。

鄧 晶音

「こんな風にみんなと出会えたことは偶然でもなくて、必然でもなくて、奇跡なんじゃないかな。60億人もいるこの世界の中で、私たち63人がここ土光村で出会たって、とっても特別なことなんだよね」

キャンプも3回目。りんほう、へく、そして土光。

そこでは出会いと別れが凝縮されていた。毎日が小さな選択で埋め尽くされ、大きな選択もやってくる。ひとつひとつの選択が、かけがえのないものであった。今ここにいなければ次はもうこんなこと出来るチャンスは来ないんじゃないか。ずっと自分に問い続けていた。毎日が生きてる、と実感できる日々だった。2週間半。長いようであつという間に過ぎ去っていった。こんなに長く村にいたのは初めてだった。これまで行った村は村人の数がそんなに多くなかったし、子どももたくさんいなかった。キャンパーが24人、村人が39人。すごくすごく賑やかで、あつたかくって。みんなで食べたご飯はどれもとびっきりおいしくて、みんなで床に寝そべったのはとっても気持ちよくみんなでダンスしたときはすごく楽しかったんだ。

村はいつも大切なことに気づかせてくれる。普段の生活では忘れがちな感謝の思い、自分のシンプルな思い、そして愛。ご飯を作ってくれるひとがいる、食器を片付けてくれるひとがいる、洗濯をしてくれるひとがいる。勝手にできてるんじゃないくて、してくれているひとがいるから、ご飯も食べられるし、食器だってきれいだし、洗ってある服が着られる。こんな当たり前のことなんだけど、頭でわかることと肌で感じることはやっぱり違うんだよね。

誰かが傍にいてくれることがすごく嬉しく思えるんだ。キャンプ中、他愛もないことで盛り上がりたり、ときには深い話もしたり、自分の思いを伝えたり。みんな境遇が違うから、いろんな思いを知ることができた。一緒に過ごしているうちに、自分の家族のように思えてくる。おじーちゃん、おばーちゃん、おにーちゃん、おねーちゃん、妹、弟。とっても大切な存在なんだ。

今回のキャンプのテーマ「村人はキャンパーたちが村にやってくることを嬉しく思っているのか」の答えは出し切れていない。けれど、村人たちのあの笑顔を見て、私たちがしている活動には大きな意味があつて、土光村の村人は私たちがあつたかく受け入れてくれ

た。嬉しいって言う気持ちは一方通行じゃないと思ってるから。私は土光村でキャンプができて嬉しかった。だから村人も嬉しく思ってくれてる。そう思ってる。キャンプの2週間半で、人間の本质が問われてくるのかなつて今、思ってる。

原田 真二

今回のワークキャンプに参加して、これから自分自身が取り組むべきだと思うことが比較的是っきりとしました。それは、①その地域を開発（経済的側面だけではない）する上で必要だと感じる知識を身に付けること、②組織を運営していく上で必要だと感じる分野について学ぶこと、そして、③今後行っていく活動の社会的位置を総括的に捉え、その時々に応じた活動の方向性を定め、実践していくことです。

①について具体的に学ぼうと思う分野は、国際的視点・国内的視点（単純に区別出来るものではないが）のどちらからも必要な現代史、政治、それらに絡み合っている経済、その発展に伴う公共政策等についてです。②については、組織を運営する上で学んでおきたい経営学です。また、③については、近年のシステム理論を研究し、個人や組織の創造性、社会の多様性や偶発性、歴史性を踏まえた新しい社会科学と、そのための道具を構築し、それを実際の活動に反映させていくことを目指します。

その他、企業の社会的責任、サステナビリティ、グローバルイノベーション等の関心事について体系的に研究し、それと並行して語学習得を目指していきます。今まで、そして今回のワークキャンプを通して得たこと一人と人とのツナガリーは、今後の活動に大きく影響していくと思います。今回のキャンプに関わったひとりひとりに思いを馳せ、その全てのひとに感謝いたします。

●おわりに●

私たちは、土光村でのキャンプは終わったと思っていません。もちろん、今年の夏のワークキャンプでワークニーズは完成しました。実際問題として土光村に大きなワークキャンプをするワークニーズはないと考えています。でも、それでキャンプが終わりになるのは絶対にいやです。私は達筆でないのでなんて表現したらいいのかわからないのですが、キャンパーが訪れるという本当の意義を土光村から消したくはありません。では、年に1、2回キャンプをすることが限度な私たち日本人はどうしたらいいのだろうと考えました。関東委員会の考えとしては、リンハウ村、プーニン村のように中国人キャンパーが村人が好きで定期的にミニキャンプを行っていたら、キャンプは成功だったといえるんじゃないかな?と思いました。今回のキャンプではそこまでたどり着いたとは思いません。なぜなら、そこまでの話の内容をもっていくことはできませんでした。現実には、ちょっとしたワークニーズを残っている。さあどうしよう。ということを経営中に一緒に考えることができませんでした。もちろん、中国人キャンパーとメールやMSNで伝えることは可能ですが、私は、FIWCらしく共に考え行動したいです。そのため、私は冬休みの12月20日付近から都合のいい時期にまた土光村でミニキャンプをすることを計画しています(ただ単純に、私が土光村でキャンプをしたいだけです)。土光村のキャンプはまだ終わっていません。



今回の夏のキャンプを開催するにあたって、多くの協力者に恵まれました。まず、下見の段階より協力してくださったJIA関係者の方々、特に原田燎太郎さん、GY。日本でのサポートとして吉田亮輔さん、森元美代治さん、國分伸浩さん。キャンパーのバックアップとして中国キャンプOBOGの皆様。そして、FIWC 関東委員会のメンバー、FIWC 関東委員会フィリピン、ネパールキャンプのキャンパー、FIWC 関西委員会、FIWC 九州委員会、Qiaoの方々・・・ほかにも、ここに書ききれないくらいの人々との出会い、関わり、幾層にも重なり合って2008年夏土光村キャンプは成功しました。私たちは全力で夏のワークキャンプのため全力で準備をし、考え、創り上げました。そして、私たちは、夏の土光村キャンパー24名との協力と絆で結ばれた兄弟。そして、土光村の村人じいちゃんばあちゃんと家族になることができました。私たちの見えない背景に、多くの本当に多くの関係者の苦勞や奮闘があったと思います。私たちは、直接その場で「ありがとう」を言えなかったことを残念に思います。けれど、このキャンプを創るにあたって一つでも足りなかったら成功は無理でした。紙面を通して、お礼を言わせてください。ありがとうございました。

以上で2008年夏土光村ワークキャンプ報告になりますが、今後もFIWC 関東委員会中国キャンプの盛栄を祈り、ご協力お願いします。

文責：FIWC 関東委員会中国キャンプ リーダー 高橋真代